

Title	2008年度Keio-Cambridge Joint Seminar報告：(7月24 - 25日、ケンブリッジ大学)
Sub Title	
Author	山崎, 由美子(Yamazaki, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	Newsletter Vol.5, (2008. 10) ,p.2- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000005-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2008 年度 Keio-Cambridge Joint Seminar 報告

(7月 24 - 25 日、ケンブリッジ大学)

昨年度に続き、今年度も7月24、25日の二日間、ケンブリッジ大学において合同セミナーが行われた。セミナーの目的は、GCOEと、同大学心理学部比較認知研究室の若手研究者の間で、互いに研究を発表し、討論を行い、交流を深めることである。GCOE側からは篠塚一貴、直井望、山本絵理子、山崎由美子、ケンブリッジ大学からはNicholas S. Clayton教授、Anthony Dickinson教授、および両研究室に所属するLucie Salwiczek、Chris Bird、Scott Stevens、神前裕の計10名に加え、何名かの参加者を交えてセミナーが行われた。一人あたりの発表時間は30分、その後に15分の質疑応答の時間が設けられた。

発表者の発表内容については以下の通りである。一日目はカケスにおける物体の保存の理解と食物貯蔵の発達についての発表(Salwiczek)で始まり、続いて、魚類の育児行動とホルモンの関係(篠塚)、NIRSを用いた幼児の音声知覚時の脳活動(直井)、ヒトの幼児で用いられている“expectancy-violation”手続きをミヤマガラスに適用した研究(Bird)が紹介された。二日目は、他個体が貯蔵した餌をこっそりと盗み取るために、観察者側のカケスが用いる方略(Stevens)、ハトを用いた同種他個体の動作認識とその脳内責任部位についての実験(山本)、ニホンザルを用いた道具使用訓練(山崎)、反応と結果との相関関係への感受性が目的的行動の維持に果たす役割(神前)、についての発表があった。発表が終わった後、文字通り円座になって、

比較認知の様々なトピックについて話し合うラウンドテーブルの時間が一時間ほど設けられた。二日間のセミナーは、Pembroke Collegeでの晚餐で幕を閉じたが、Dickinson教授によるラテン語での食前の祈りには、一同驚くのみであった。

GCOE側の発表については、昨年同様、事前にたくさんの練習を積んだ甲斐もあり、明瞭な英語を用い、時間制限を守って適切に行うことができた。ケンブリッジの研究室が比較認知を専門とすることもあり、GCOE側の発表者が用いた神経科学的な手続きについてどのくらい理解できるか少々不安があったが、発表後の質問から察するに、十分に平易に説明できていたようである。

研究者として大変著名な二人の教授を前にしての発表であったものの、逆に二人の和やかな雰囲気により、セミナーは堅苦しくなく進められた。ラウンドテーブルの時間は、議論に入っていくタイミングの点でとまどいがあったが、セミナー同様、緊張せずちょっとした会話の気分が入っていくのがよいのではないかと思った。事実、質疑応答や休憩の時間に、実験手続きや装置の細かな点について、すぐにも実行可能なよいアイデアがいくつか出され、互いに益するところがあったようである。結果として、合同セミナーは、研究室での同僚との日常会話のような交流の場となり、同世代の、興味を共有する者どうしが今後切磋琢磨できる貴重な機会となったと思う。(山崎由美子)

